

放送日： 平成 20 年 2 月 18 日
タイトル： くも膜下出血について
担当者： 医師 田中 敏樹

くも膜下出血は、皆さん一度はテレビや新聞などで名前を聞かれたことがある有名な病気だと思います。今回は、くも膜下出血がどのような病気かを簡単にお話します。

くも膜下出血は、脳の病気の中で突然死の第一の原因となる、たいへん重篤な病気です。症状としては、突然、今までにないような激しい頭痛がおこるのが特徴的です。普段元気にしていた人が、前触れなく、急にひどい頭痛を訴えて、意識をなくして倒れたり、激しく嘔吐するようになれば、この病気を疑います。ひどい場合は、その場で呼吸が止まって死亡されます。40~50 歳代以後に多く発生しますが、中には 20 代、30 代で発症される方もおられます。

治療が発達してきている現在でも、死亡率が 50% 近い、大変怖い病気です。

くも膜下出血がどうして起こるかと言いますと、脳の動脈にできたこぶ、すなわち脳動脈瘤が破裂して起こることが最も一般的です。破裂といいましても、風船のように破れるのではなく、動脈にできたこぶの壁の薄いところが弱くなって、急に漏れ穴ができて、その穴から脳の表面に勢いよく血が吹き出して出血します。血の勢いが大変強い場合は、脳全体の血の巡りが悪くなって、意識を失ったり、息が止まって死んでしまいます。勢いが弱くてある程度で血が止まると、症状は頭痛だけで、診療所や病院の外来に自分で受診されることもあります。多くの方はひどい頭痛のため動けなくなり、救急車を呼んで病院に來られます。一般的に病院に到着するまでや、到着してもすぐに、くも膜下出血の患者様全体の 3 割くらいが死亡されるようです。

くも膜下出血の原因となる脳動脈瘤は、成人の方皆さん 100 人程集めてきますと、昔は 1 人くらいが持っていると考えられていたのですが、実は 3~4 人くらいの方がお持ちであることが、最近検査法が発達してわかってきました。脳動脈瘤は、破裂するまではほとんど何の症状も起こさないことが多く、破裂してはじめてくも膜下出血を起こして診断がつくことが今までは一般的でした。しかし、最近、脳ドックがよく行われるようになり、未破裂の状態でも脳動脈瘤が見つかるようになり、発見される頻度が増えてきました。脳ドックでは MR アンギオという検査を行い、直径が 3mm をこえる脳動脈瘤なら、かなり確実に見つかるようになってきております。ただし、破れる前が見つかった脳動脈瘤が、どれくらいの頻度で破れてくも膜下出血になるのか、まだはっきりとはわかっておらず、また脳動脈瘤の治療が必ずしも安全でかんたんな治療ではないため、見つかった脳動脈瘤をどうするかはまだ個別に相談して決めているのが現状です。脳動脈瘤を持っていることをあえて知らない方がいい場合もあるかもしれません。

話をくも膜下出血に戻しまして、これから、病院での診断や治療のお話に移ります。くも膜下出血を疑いますと、まず CT スキャンという検査を行い、これでくも膜下出血の診断をします。くも膜下出血とわかりましたら、当院では引き続き造影剤を使った CT 検査を行い、出血の原因となった脳動脈瘤がどこにあるかを調べます。通常、病院に運ばれてくるときは、一旦、漏れ出た血は止まっているのですが、血管の漏れ穴には血のりがかぶさって止まっているだけですので、そのままでは動いたり、血圧が上がったりするとまた血が漏れだしてしまいます。これを再出血と言います。再出血がおこりますと、そのために思慕される危険が大変高いため、動脈瘤の場所や形、大きさを検討して、再出血を防ぐ手術を、入院から数日以内に行うことが一般的です。手術の方法は、頭の骨をあけて直接動脈瘤を処置するクリッピング方法と、血管の中からカテーテルという細い管を動脈瘤まですすめて中から柔らかいプラチナ製のコイルで詰め物をするコイル塞栓術という方法があり、どちらを行うかは患者様の状態や動脈瘤の状態を調べて判断します。

しかし、手術がうまくいきましたも、それで治療が終了するわけではなく、その後、くも膜下出血の血の影響で脳の血管が縮んで脳梗塞をおこす脳血管れん縮という怖い状態が起こったり、脳脊髄液の流れがくも膜下出血のため悪くなり脳に脳脊髄液がたまって起こってくる水頭症などの合併症がおこってくるため、治療には 3 週間から 1 ヶ月が必要となります。それら乗り越えてはじめて退院となります。これらの合

併症のため脳の後遺症を残される方も多く、元気にまた社会復帰をしていただける方は、くも膜下出血全体の2～3割くらいです。

また、血のつながったご兄弟やご両親にくも膜下出血を起こした方や脳動脈瘤をお持ちの方がおられますと、脳動脈瘤をもっていたり、くも膜下出血を発症する危険が数倍たかくなるといわれています。

当院脳神経外科では、くも膜下出血の患者様の救急の治療や、脳動脈瘤に関しての相談、診察を行っておりますので心配な方がいらっしゃいましたら、また外来におこしください。